
わんだーらんど ぱにつく

べあ。(YUKINO.)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わんだーらんど ぱにっく

【コード】

N9929K

【作者名】

べあ。(YUKINO.)

【あらすじ】

女子高生の少女、愛坂れみるは何故か突然 異世界“わんだーらんど”に迷い込んでしまう。獣耳やらツンデレやら魔法使いやら個性的な奴らが登場するドタバタラブコメディー。

第1話 ニジハニジハ

やばい。

そう思ったときにはもう遅かった。

わたしは今、落ちてている真っ最中である。

そう、とてもとても高いところから……

「ひぎゃあああああああ……!!!!!!」

……どこからだっけ？

ズズズズズズ……

「痛あつ」

落ちた。すごく高いところから落ちた。

「ああもう本当痛……ん？」

おかしい……

痛く、ない。

あんな大きな音を立てて落ちたんだから結構高いところから落ちたんだろう。

なのに、全然痛みを感じない。

昔から個性的だっって言われてたけど
痛みを感じないほど個性的だった覚えは無いぞ！

もしかして麻痺してる…とか？
ために自分のほっぺたを思いつきりつねってみた。

「…痛い…」

なにこれいじめ？
つねった方が痛いつてどうなのさ。

どうやら麻痺しているわけではないみたいだ。

それにしても、

あれ？私、どこから落ちたんだろう？
家族とか、そういうのは分かるんだけど
どこから落ちたのが、どうも分からない。

そこで私はもうひとつおかしなことに気がついた。

上を見上げても、何も無い。

正確には青い空が広がっている。
だけど本当にそれだけ。

落ちてきたであろう建物とか、そういう対象物が無い。

「……………」

わからないことばっかだ。
とりあえず頭の中整理しよう…。

私が今いるのは、道の上。
周りには大きな木とかきれいなお花とかが生えてる。
人はいない。

ここは森の中か何か？ かな？

いやいやいや待て。

私が住んでるのは都会で、
近くに森があつた覚えはない。

どこだよここ！

頭の中整理するどころかさらに疑問増えちゃったよ！！

私が悶々（もんもん）と考えていると、突然後ろから声をかけられた。

「邪魔」

…はい？

第1話 ココはどこ？（後書き）

べあ。といます。早くて週1ページの投稿になると思います。

ggdggd小説になると思いますがどうぞ生暖かい目で見ていてやって下さい！

< > < > > じんなかんじで

第2話 オオカミさんと双子の赤ずきん

「邪魔」

・・・はい？

「・・・」

目の前には藍色の髪の毛の目つきの悪い男の子が立っていた。
なんかめっちゃ睨まれてるんですが；

「おい聞いてんのか？そこどける！」

私は今の自分の状態を見直してみた。

・・・狭い道に座り込んでいるようです。

これはもしかしなくても私に言ってるんだらうか？

「あ、ご、ごめんなさい！」

私は慌てて道の端っこによけた。

「ふん」

・・・なんだこいつ。

確かに私が悪かったけどさ、もうちょっとこいつ、
言い方ってもんがあるでしょうが！

「ちよっと何その言い方ーあ」

・・・あれ？

「そっだよっもうちょっと言いつてのがあるでしょっ」

・・・私が思ってることが言葉になってる。
でも喋ってるのは私じゃなくて・・・

「おにいちゃんってば！」「」

えーっと、誰でしょう。

「なっ・・・だってコイツがこんなとこに座り込んでるから・・・」
「っ」

「もっと優しく言えないのかって言ってるのっ」

「ちゃんと謝ってあげてよねえー」

「・・・チツ・・・悪い・・・」

今舌打ちしたよね！絶対謝る気ないよね！

それにしてもさっきからしゃべってる女の子は誰だろう？

「おねえちゃん、大丈夫っ？」

「そんなところで何してるのーお？」

男の子の後ろから赤ずきんちゃんの格好をした
女の子が2人出てきた。

なにこれめっちゃ似てるんですけど！

え、分身！？分身なの？！
・・・うん、双子だね。

2人は左右対称で赤と青のオッドアイだ。

右側にいる女の子はピンク色のずきん、
左側にいる女の子は水色のずきんを身につけている。

どちらも髪がハニーブラウンで綺麗・・・。

「おーい、おねえちゃんっ？」

「あ、うん、大丈夫！」

「何してたのーお？」

・・・何してたんだらう。

「えっと、信じてもらえるか分からないんだけど・・・」

私はどこに住んでるのか、
どうやってここに来たのか（というか私も良く分からないけど）を
話した。

「んーと、つまりそれは・・・どういうことーお？」

「異世界トリップとかいうやつじゃないのっ？絵本で読んだっ！」

絵本で・・・かわいいな。
とこるで、

「ここはどこなの？」

「“わんだーらんど”だよ」

「ワンダーランド？」

「ううん、“わんだーらんど”」

「……？いまい違いが分からないんですが……」

「えーっと、、Wonderland？」

「“わんだーらんど”だっつってんだろ、バカかお前！」

だから何が違うんだよ……！

てゆーかこの人……

「まだいたんですか」

「だめなのかよ！」

その男の子は私にむかってなにやらガミガミ言い始めた。

「……頭からなんか生えてる。」

「耳……？黒っぽい獣の耳だ。」

「……コスプレ？」

「は？」

「いや、頭に猫耳つけてるから・・・」

「猫みてーな軟弱なのじゃねーよ！
オオカミだオオカミ！」

ああオオカミか。

それにしても獣耳って萌えるなあ・・・

「オオカミのコスプレ？」

「コスプレじゃねー！れっきとした耳だよ！」

その男の子はずいっと自分の頭を差し出してきた。

「・・・本当に頭に生えてる」

そっだ、試しにひっぱってみよう。(待て
ぎゅむ　　・・・)

「痛えっ！何すんだテメー！」

「・・・」

なんでとれないの？

じゃあ本当に本物の耳ってこと？
人間じゃないの？

あれ、もしかして私が知らなかっただけで
みんな獣耳生えてるものなのか。

「無視かよー！」

「おにいちゃん、口悪いってば!」「」

2人の赤ずきんちゃんからハイパーキックが炸裂した。

第2話 オオカミさんと双子の赤ずきん（後書き）

【愛坂れみる】

主人公。高校1年生。

身長156cm、体重（happy）。

個性的、というか萌／え／要／素などに
変に反応するらしい。

綺麗な黒髪でなかなかの容姿^{ぶし}。

|||||

pixivにキャライラスト投稿していく予定です！

タグ「わんだーらんど ぱにつく」で検索してください！

第3話 森をぬけて

「そいえば、自己紹介まだだったね。
私は愛坂れみる。あなた達は？」

「ぼくはチェリーだよ」

「で、ぼくがアクアっ！」

なるほど。ピンクずきんの方がチェリーちゃんで、
水色ずきんのほうがアクアちゃんらしい。
なんとも可愛らしい名前だ・・・
てか一人称まで一緒なのか？！

「えーつと、あなたは？」

私は少し後ろを歩いている獣耳の男の子に聞いてみた。
・・・ちよ、この子涙目なんですけど。
ちよつと可愛い。

さっきのハイパーキックのダメージが相当なものだったらしい。
恐るべし双子・・・！！

「・・・」

「・・・おい？」

「おにいちゃん自己紹介」

ビクッ

「・・・ベスター」

ようやく答えてくれた。

ベスター君はどうやら双子に弱いらしい。
というよりただ単に怖がってるだけか。

「じゃあ、チエリーちゃん、アクアちゃん、ベスター君
よろしくね！」

「よろしくっ！」

「わーい友達増えたあ！」

「ベスターで良い！」

「・・・え？」

「“ベスター君”とか気持ち悪いんだよ！」

「えーと、じゃあ、ベスター」

「ふんっ」

・・・なんだコイツ自分から言っというて・・・
つてなんかこれデジャヴ。

さっき可愛いって言ったの撤回。

「ところで、私達はどこへ向ってるの？」

「んー？ぼく達のおうちだよお。」

おにいちゃんと、アクアと、ぼくの

「おねえちゃん行く所ないんでしょっ？
とりあえずうちにおいでよ」

「えっでも悪いよ」

「人がせつかく親切に言っつてやってんだから
素直についてくれば良いんだよ！」

な、なんていい人たちなんだ・・・！！！！

「っ ありがとう」

「なっ別にお前のためじゃないからな！

俺らが放つておいて死なれたりしたら困るから・・・」

・・・ツ、ツンデレなのか？！

も、も、萌e（自重

「あ、もうすぐ森ぬけられるよお」

「おうちまでもうすぐだからね」

私は三人の家に向うことになった。

「はいっここが僕たちのおうちですっ」

丘の上にぽつんと一軒建っている家を指して

アクアちゃんが言った。

その家は、なんていうんだっけ、そうログハウス。家の周りには花がたくさん植えてあってまるで物語に出てきそうな感じだ。

「どうぞお」

「お、おじゃまします!」

木の扉を開けるとこれまた可愛らしい感じ。

ぬいぐるみとかおもちゃがたくさん置いてあって、家具はパステルカラー基調になっている。

・・・こういうのメルヘンチックっていうんだっけ？

「可愛いお家だね!・・・ベスターの趣味?」

「違いよ!」

「あはは冗談だっけ」

これがベスターの趣味だったら、私は多分笑い苺を食べた人みたくなってしまう。人を見かけで判断するのは良くないけどさ。

「おねえちゃん、お家に帰る方法わからないんでしょ?」

「うん・・・ここがどこかも分からないし」

「じゃあ帰れるようになるまで

ぼく達のお家で暮らせばいいよお」

「手がかり見つけるのとか、いろいろ協力するしっ!」

私としてはこの上なく嬉しいことなんだけど、ベスターがいるし・・・。

「「いいよねおにいちゃん」

「何言つて・・・」

「「いいよね！」」

「うっ・・・もう勝手にろよおおお！」

「あ・・・」

そういつてベスターは走り去っていった。
泣きそうな顔になって・・・

「い、いいの？」

「うん！おねえちゃんは一切心配しなくていいからねえ」

「おにいちゃんどうぞすぐ帰ってくるよっ」

うーん、なんとも厳しい双子だなあ・・・

・このお話はギャグです。ベスターが走り去っていったことは
全く深刻に考える必要がありません。軽く受け流してね

・・・ようするに、

シリアスシーンではないということらしい。

第3話 森をぬけて（後書き）

【ベスター】

歳はまだ不明。狼の耳。

よく言えばツンデレ。ツンデレなのを
省いたらただのいやな奴。

双子のお兄ちゃんらしい。

髪の毛は蒼色で、瞳は赤色。

第4話 GO THE TOWN!!

「でも本当にいいの??」

「うんっ、人数多いほうが楽しいしっ」

「本当はお兄ちゃんも嬉しいはずだよお」

「だよねっ可愛い女の子に弱いから・・・」

「え?」

「なんでも無いっ!あ、そだ、お姉ちゃんの部屋どこにしようかつ?」

「あ、ねえ、あっちはあ?空き部屋があつたと思うよお」

そういつて連れて行かれた部屋は、5帖くらいの可愛らしいうす紫色基調の部屋だった。

家具も、ソファや机、タンスなどがそのままにしてある。

「ここをお姉ちゃんの部屋として使ったらどうかなあ?」

「そうだねっ、お姉ちゃんこの部屋でもいいっ?」

「うん!ありがとう!!でも、家具とか揃ってあるけど・・・誰かが使ってた部屋なの?」

「魔法使いの女の人に住んでたんだよお。お姉ちゃんみたいに、記憶が無くて・・・。今は森の奥で魔法の勉強とか、いろいろしてるのよお」

「僕たちは、3人でよくその魔法使い……魔奇まきさんの
ところに遊びに行くんだっ」

だから出会ったとき森にいたのか。

「ところでお姉ちゃん、着替えとかあるの？」

「え？……あ……そいえば無かった……」

「じゃあ街と一緒に買いに行こお　ここからそう遠くない
ところにお店がいっぱいあるんだよお」

「森と反対側の道を真っ直ぐ行くんだっ！今から行こっっ」

「え、今から？」

「今からっ！」

思い立ったら即行動型なのか。

「いいねえ！お財布とかご持ってくるよお」

あ、やっぱり赤ずきんちゃんといえばかごだよね！

しばらく歩くと、華やかな街に着いた。
ヨーロッパの街並みって感じた。

「いっぱいお店あるね！」

「可愛いお店いっぱいだよ」

「じゃあ、まずは服屋さんに行こうっ！」

「僕たちオススメのお店があるんだよ」

・・・私のサイズの服もあるかな？；

【一店目】洋服店；Sweet Girls

うわぁ・・・いかにも女の子らしい服売ってますって

感じだなぁ・・・似合うのか私いいいい

その前にとりあえずサイズが心配だ。

「大丈夫だよ。大人サイズから子供サイズまで

品揃えカンペキだもん」

「マジか！！ってあれ？読心術？！」

「いや・・・バツチリ声に出てたよ」

恥ずかしい子だな！！私だけど。

カランコロン・・・

「こんにちわっ」

「美々（びび）ちゃん、来たよ」

「おっチェリーにアクアじゃん！！

久しぶりじゃねえか！」

うわ！ナイスバディの美人おねえ様・・・！！

本当神様って不平等だよね(。 。)

「・・・とあれ？うしろの可愛いお嬢さんは？」

「朝、森で出会った異世界から来たっていう

迷子のお姉ちゃんだよっ」

「今日から僕たちと暮らすことになったんだあ」

「愛坂れみると言いまちゅ！」

うあああああ 噛んだああああ

ありがちな噛み方したよ！

初対面なのに・・・恥ずかしい。

「あはは！面白い子だな！

俺は美々。よろしくな」

「よろしくお願ひします！美々さん」

「でね、美々ちゃん、このお姉ちゃん服も下着も

なんにも持ってないから選んであげてほしいんだあ」

「カワイイの選んであげてねっ」

「まかせろっ！じゃあ、ねみる、ついてきな」

「はいっ！」

「僕たちはこっちで服見とくねえ」

「楽しみにしてるよっ」

第4話 GO THE TOWN!! (後書き)

【チェリー】

双子の妹。語尾をのばす癖がある。

ハニーブラウンの髪の毛。

右目が赤で、左目が青。

ピンク色のずきんをしている。

一人称は 僕。11歳くらい。

【アクア】

双子の姉。語尾を切る癖がある。

ハニーブラウンの髪の毛。

右目が青で、左目が赤。

水色のずきんをしている。

一人称は 僕。11歳くらい。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

お気に入りしてくださった方ありがとうございます<>

第5話 ショッピング

うっわぁ・・・

私は今、Sweet Girlsの試着室にいる。
美々さんに服を選んでもらって、半ば強引に・・・

というか、こんなフリフリな服私には似合わないってば！

「どうだー？サイズ合ったか？」

「は、はい・・・でも・・・あっ」

シャツ

か、勝手にあけられた！！

「うんうん似合う似合う！やっぱり俺センスいいな」

自分で言うことなのかそれ。

「似合いませんよ！こんな女の子らしい感じの服なんて・・・」

今私が来ているのは、淡いピンクのワンピースで、袖が
パフスリーブになっている。
胸元切り替えてリボンもつけてあって、下のスカートはフリフリの
レースがふんだんに使われている。

「似合うつて！・・・それとも俺のセンスにけち付けんのか？」

美々さんは私をギロツと睨んだ。

うつ・・・こ、怖い。

「・・・ぶつ 冗談だつて〜！それより

チェリーとアクアに早く見てもらおうぜ！」

そういつて美々さんは近くの店員に二人を呼んでくるよう頼んだ。

しばらく経つて両手に大きな袋を持った二人がやってきた。

この短時間でどれだけ服買ったんだ・・・

「わあっお姉ちゃん似合うつ！」

「うんうん、可愛いよお」

「そ、そうかな・・・？」

そんなに褒められたら悪い気はしない。

「な、言っただろ？」

美々さんはえっへん、と得意げに胸を張っている。

「あ、そだ、僕たちお姉ちゃんの服買ったんだあ」

「う似合いそうな可愛いのが向こうにもいっぱいあったからねっ」

そういつて二人はガサゴソと服を出し始めた。

も、もしかしてその両手の袋は全部私の・・・？

「うわ・・・こりやまた一段と女の子らしいチョイスを・・・！」
ビビットピンクのパニエに、白い清楚なワンピース。
水色と白の水玉の短いワンピース、ドレスみたいなロングスカート。
・・・。

ほかにも、どれもこれも可愛いアイテムばかりだ。

「ねっ可愛いでしょっ？僕たち二人で選んだんだっ」

「気にいってくれたあ・・・？」

「うっ」

そんな上目遣いで見られたら首を縦に振るしかないじゃないか・・・
！

「う、うん、ありがとう。気にいったよ」

「よかったあ！」

「どんどん着てねっ！」

コレを着て街に・・・なんだか気恥ずかしい。

「美々さん！お会計よろしくーっ！」

「はいはい」

ん？お会計？

「え、あの、私お金持ってないんだけど・・・」

「うーん、しょうがねえな。今回はツケといてやるよ」

「いいですか？」

「おうつ気にすんなって」

そういつて、ニヤリと美々さんは笑った。
ん？なにか企んでる？・・・気のせいだよな。

「ありがとうございますー！また来いよ！」

「は、はい！また今度！」

美々さんに見送られながら、私達三人は店を後にした。

「よしっじゃあ服買ったことだし、次は下着見にいこっかつ」

【二店目】ランジェリー・ソックス；GUSH

「僕たちこのお店はまだ言ったことないんだけどねえ」

「魔奇ちゃんがオススメしてくれてたんだっ」

お店の前まで来た。さっきの店とは打って変わって

大人の雰囲気漂うお店だ。

こりゃあ11歳の少女達には早いわな。

お店のドアを開けると、妖艶な女性が出迎えてくれた。

「あらあ、いらっしやい。見慣れない顔ね」

同じ女の私でも見とれてしまうような美人な女の人だ。

「はじめましてえ！僕たち魔奇ちゃんの紹介できたんですけどお・・・

」
「魔奇ちゃんのことぶぶ、いつもご贔屓にしてくれてるのよ。」

でも、あなたに合うような下着はあるかしら・・・」

「違いますよお！今日はこっちのお姉ちゃんに・・・」

「まあ、そうよね。ふふっ私ったら・・・ごめんなさい」

上品に手を当てて微笑んでいる・・・いやあ、美人だ。

「ご自由に見て行ってね。ソックスは向こうのコーナーにあるから・・・」

「は、はい。では・・・」

な、なんだか喋ってて緊張してしまうな・・・。

さすがのチェリーちゃんとアクアちゃんも大人しくなっている。

「えーと・・・うわ」

セクシーな下着ばかりで、私には、ま、眩しい・・・！

第一サイズがあるかどうか心配だ。

「うーん、お姉ちゃん貧にゆ・・・じゃない、痩せてるからっ」

「そだねえ、サイズが・・・」

子供って残酷だなあ。す、ステータスなんだからあつ！！

「あなた達・・・あちらのほうをオススメするわよ」

そついつて案内されたコーナーには同じ年代の女の子達が何人かいた。

「ありがとうございます」

そついうとニコつと微笑んですぐ戻っていつてしまった。
なんだか負けた気になるのは私だけなんだろうか。。。

しばらくして、靴下も下着も一通り選び終わった私は、
やはりお金を持っていないわけで・・・
チエリーちゃんとアクアちゃんに払ってもらってしまった。
年上としてどうなのだろう。

「ごめんね・・・払ってもらっちゃって」

「うつん気にしないでっ 持っていないんだから仕方ないよっ」

や、優しさが身にしみる・・・!

ひとりで感激していると、誰かにぶつかった。

「きゃあっ」

「あぼがっ」

派手にすっ転んだ私の叫び声は勿論後者の方である。

第5話 ショッピング(後書き)

【美々】

洋服点、Sweet Girlsの店長。

金髪の巻き髪をポニーテールにしている。

25歳のナイスバディーなおねえ様。

お店には姫系の服を集めているわりに、自分は

ギャル系を着るといふなんとも奇妙な組み合わせになっている。

男勝りな正確と喋り方で、女性にもモテる。

|||||

更新遅れてしまつてごめんなさい・・・orz!

スライディング土下座。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929k/>

わんだーらんど ぱにつく

2010年10月11日08時05分発行